

つどいの広場における保育者の新たな役割 —通常保育の応用としての子ども子育て支援—

水 谷 百 瀬 々 倉 玉 奈
(子どもの家福祉会 本山北町あすのこども園) (教育学科)

3歳未満児の7割前後が未就園児であると言われており、地域における未就園児の家庭への支援が重要視されている。地域子育て支援拠点事業の一つである「つどいの広場」は、地域における子育て支援の中で重要な位置づけにある。一方で、つどいの広場で働く保育者は、通常のクラス運営による保育業務とは異なる新たな役割を求められている。本稿では、あるつどいの広場におけるフィールドワークやインタビューを通して、保育者の新たな役割について分析した。

キーワード：地域コミュニティ、未就園児、保育の応用、ICT、臨床心理学

1. 問題と目的

(1) 子育てをめぐる環境と保育者

近年、社会構造の変化により、子どもを取り巻く家庭の養育機能は少子化や核家族化、共働き世帯の増加、地域コミュニティの希薄化などから低下しており、子育て環境も大きく変化している。このため、子育ての悩みや不安を抱え、育児困難感を有する養育者が増加し、身近に相談相手がいらないことから子育て家庭が地域で孤立する傾向にある。

かつては、地域コミュニティの中で祖父母や親戚、地域の人など身近にいる多くの大人や子どもが子育て家庭に関わることで、子どもを地域で見守るだけではなく養育者も周囲のサポートを受けることができていた。文部科学省令和2年度「家庭教育の総合的推進に関する調査研究」では、子育てに対して7割程度が地域の支えが重要と回答している。

子育て家庭を取り巻く課題や不安を解消するために、子育て家庭のニーズに合わせ、様々な子育て支援が実施されている。

(2) 地域子育て支援拠点事業

幼児期の学校教育や保育、地域の子育て支援の量の拡充や質の向上を進めるため、「子ども・子育て支援新制度」が2015年4月に開始された。子どもの年齢や親の就労状況などに応じて働きながら子育てしやすいような環境を整えるなど多様な支援を用意し、必要とする全ての家庭が利用できる支援を目指している。

支援の質を向上させ子どもたちがより豊かに育っていけるよう、幼稚園や保育所、認定こども園などの職員配置の改善や職員の処遇改善も行われている。

また、公共施設や保育所などで、行政やNPO法人が担い手となり、地域の身近な場所で気軽に親子の交流や子育ての相談ができる地域子育て支援拠点が開設されている(図1)。子育て支援などの関係機関とのネットワークを構築し、地域の課題に応じて必要な子育て支援事業や活動の開発を進め、子育てしやすい地域づくりを行うことを目的としている。

図1にあるように、地域子育て支援拠点事業の施策の背景には、3歳未満児の約6～7割は家庭で子育てを行っており、核家族化や地域の繋がりの希薄化による子育ての孤立化、子育ての不安感や負担感が増大したことが挙げられる。

<子ども・子育て支援交付金（こども家庭庁）+ 重層的支援体制整備事業交付金（厚生労働省）>

令和6年度予算 2,208億円の内数（1,920億円の内数）※（）内は前年度当初予算額

1. 施策の目的

背景

- ・3歳未満児の約6～7割は家庭で子育て
- ・核家族化、地域のつながりの希薄化
- ・自分の生まれ育った地域以外での子育ての増加
- ・男性の子育てへの関わりが少ない
- ・児童数の減少

課題

- ・子育てが孤立化し、子育ての不安感、負担感
- ・子どもの多様な大人・子どもとの関わりが減
- ・地域や必要な支援とつながらない

地域子育て支援拠点の設置

子育て中の親子が気軽に集い、
相互交流や子育ての不安・悩み
を相談できる
場を提供

2. 施策の内容

○一般型 公共施設、空き店舗、保育所等に常設の地域の子育て拠点を設け、地域の子育て支援機能の充実を図る取組を実施

○連携型 児童館等の児童福祉施設等多様な子育て支援に関する施設に親子が集う場を設け、子育て支援のための取組を実施

4つの基本事業

- ①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進
- ②子育て等に関する相談、援助の実施
- ③地域の子育て関連情報の提供
- ④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施



○更なる展開として

- ・地域の子育て支援活動の展開を図るための取組（一時預かり等）
- ・地域に出向き、出張ひろばを開設
- ・高齢者等の多様な世代との交流、伝統文化や習慣・行事の実施等

- 公共施設や保育所、児童館等の地域の身近な場所で、乳幼児のいる子育て中の親子の交流や育児相談、情報提供等を実施
- NPOなど多様な主体の参画による地域の支え合い、子育て中の当事者による支え合いにより、地域の子育て力を向上

3. 実施主体等

○実施主体 市町村（特別区を含む）

○負担割合 国（1/3）、都道府県（1/3）、市町村（1/3）

○主な補助単価（令和6年度予算）※開設日数等により単価が異なる

【基本事業】・一般型 8,714千円（5日型、常勤職員を配置の場合）

9,739千円（6日型、常勤職員を配置の場合）

（新設）10,772千円（7日型、常勤職員を配置の場合）

→現行の「6～7日型」単価を見直し「7日型」を創設

・連携型 3,257千円（5～7日型の場合）

【加算事業】・子育て支援活動の展開を図る取組（一時預かり等）

3,247千円（一般型（5日型）で実施した場合）

・地域支援加算1,592千円

・特別支援対応加算1,111千円

・育児参加促進講習休日実施加算 425千円

【開設準備経費】（1）改修費等 4,000千円

（2）礼金及び賃借料（開設前月分）600千円

○実施か所数の推移（単位：か所数）

R1年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
7,578	7,735	7,856	7,970	8,016

図1 地域子育て支援拠点事業（こども家庭庁，2023）

そこで、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場を提供するため、地域子育て支援拠点が設置された。

地域子育て支援拠点事業は、「地域子育て支援センター事業」と「つどいの広場事業」とが2007年に再編・統合された事業である。

地域子育て支援拠点には、公共施設や空き店舗、保育所などに常設の市域の子育て拠点を設け、地域の子育て支援機能の充実を図る取り組みを実施する「一般型」と、児童館などの児童福祉施設など多様な子育て支援に関する施設に親子が集う場を設け子育て支援のための取り組みを行う「連携型」の2つがある。

しかしながら、上述した再編・統合の名残りのためか「つどいの広場」という名称は継続して使用されている傾向が認められる。

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会（2017）は、地域子育て支援拠点で実施される基本事業について以下の4つの役割を挙げてい

る。

- ①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進
- ②子育てなどに関する相談、援助の実施
- ③地域の子育て関連情報の提供
- ④子育て及び子育て支援に関する講習

さらに、地域の子育て支援活動の展開を図るため、地域に出向き出張ひろばを開設したり高齢者など多様な世代との交流ができるイベントを実施したりするなど、地域で支え合い地域の子育て力を向上させることを目指して様々な取り組みが実施されている。

このような経緯の中で、幼稚園教諭や保育士などの保育者は、従来のクラス運営による通常保育の中のみならず、地域の子育て家庭への「子育て支援」にも携わることを求められるようになってきている（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2017）。

しかしながら、上述の地域子育て支援拠点事業の再編よりも前に、大豆生田（2006）は、保育者の子育て支援への関わりについては議論

が尽くされないまま進んできてしまったと指摘している。

そこで、一般型の地域子育て支援拠点として認定こども園に併設されている子育て支援ルームに注目し、実際の子育て支援の現場ではどのような子育て支援が行われているのか、子ども園に通う園児の保護者と、子育て支援ルームを利用する養育者に対する保育者の関わり方にはどのような違いがあるのかを明らかにすることを目的としてフィールドワーク調査及び保育者を対象としたインタビュー調査を行った。

本研究では認定こども園と同じ敷地内に開設されており、京都市から認可を受けているつどいの広場A子育て支援ルーム（以下、「子育て支援ルーム」とする。）を対象にした調査である。

2. フィールドワーク調査

(1) 子育て支援ルームの基本情報

以下は、調査対象の子育て支援ルームに関する基本情報である。子育て支援ルームには、こども園で通常のクラス運営による保育を行う保育者とは別に、2人の保育者が常駐しており、悩み相談や子育て講座などのイベントを行い、子育てへの不安や負担を解消する場となっている。0～3歳までの未就園児と養育者、これから母親になる妊婦らが気軽に立ち寄れ、自由に過ごすことができる。

利用可能日時は、月火木金土曜日の10：00～16：00。利用可能時間のうち、10：30～12：00は季節の行事に関するイベントや親子で楽しめる遊びなど、親子で参加するイベントを行っている。休館日は、毎週水曜日と日曜日、祝日と年末年始である。

さらに、A子育て支援ルームでは、子育ての不安や家庭の悩み、子どもの成長や発達で気になることなど、公共の場で相談しにくい話を安心して気軽に相談することができるよう、オンラインによる子育て相談も行っている。オンライン子育て相談の受付可能日時は、毎週木曜日の13：30～15：30である。

子育て支援ルームには、床にカーペットが敷かれており、靴を脱いでゆったりくつろげるス

タイルになっている（図2・3）。滑り台やぬいぐるみ、ままごと遊びなど多様な玩具類が用意されており、異なる年齢の子どもが興味のある玩具を見つけて楽しむことができるようになっている。子どもが遊びたい玩具を自ら選択して手に取ることができるように、基本的に玩具類は棚の低い位置に納められている。また、乳幼児向けのトイレやおむつ交換台も整備されている（図4・5）。



図2 子育て支援ルーム



図3 出入口



図4 洗面台・トイレ



図5 おむつ交換台

第1筆者が子育て支援ルームにて5日間のフィールドワークを実施した。子育て支援ルームの活動、及び保育者Bと親子との相互交流に注目し、関与観察を行っている。表1に、フィールドワーク調査の概要を示す。

子育て支援ルームでは、午前中に身体を動かしたり親子で触れ合ったりすることができる遊

びや季節の遊びなど毎日異なるイベントが行われる。イベントは事前に子育て支援ルームのメールにて2週間前から予約を受け付けており、前日までに予約をした親子が参加する。空きがあれば、当日の申し込みも受け付けている。

イベントの時間以外は、「にこにこタイム」として好きなおもちゃで遊んだり室内遊具で運動あそびをしたり、絵本を見たりと親子で楽しく過ごす時間を設けている。

表2にフィールドワーク5日間でイベントに参加した親子及び保育者の人数を示す。乳幼児の親子に丁寧に関わるために上限は7組としている。子育て支援ルームの利用時間は10:00～12:00であるが、12:00までは利用はせず、その日の子どもの様子に合わせてイベント終了後には帰宅する親子もいる。

5日間のイベント参加の合計利用者数は、母親21人、子ども22人で、保育者は毎回2人態勢であった。1日の利用者数は、親子が3組から6組であった。

表3に子育て支援ルームを利用した子ども22名の年齢を示す。子どもの年齢については、子育て支援ルームのイベントに参加時の年齢である。22名の子どもの年齢のうち、0歳前半が1名、0歳後半が4名、1歳が10名、2歳が6名、3歳が1名であった。子ども22名のうち、45%が1歳児と、1歳児の親子が約半数を占めている。

フィールドワーク調査では、親子と保育者Bとの関わりを中心に参与観察を行った。

以下は、手書きで作成したフィールドノートから抜粋したエピソードである。保育者Bの親

表1 フィールドワーク調査の概要

日(曜日)	天気	最高/最低気温(℃)	イベント
7/31(月)	晴れ	34.9/27.0	洗濯ジャブジャブ楽しいね(水遊び)
8/ 9(水)	強風・時々雨	32.3/24.6	みんなニコニコぷにぷに水風船であそびましょ
10/13(金)	晴れ	25.0/12.7	できるかな?お野菜の絵あわせカード(食育)
10/16(月)	晴れ	25.6/14.5	足形アートでかわいいいりすさんを作りましょ
10/24(火)	晴れ	24.0/11.8	おおきくなーれ(身体測定)

表2 利用者数

日(曜日)	母親(人)	子ども(人)	保育者(人)
7/31(月)	6	6	2
8/ 9(水)	3	3	2
10/13(金)	3	3	2
10/16(月)	4	5	2
10/24(火)	5	5	2

表3 子どもの年齢

日(曜日)	0歳前半	0歳後半	1歳	2歳	3歳	計(人)
7/31(月)	0	1	2	2	1	6
8/ 9(水)	0	0	3	0	0	3
10/13(金)	0	0	2	1	0	3
10/16(月)	1	2	0	2	0	5
10/24(火)	0	1	3	1	0	5

子との関わり方、親子にとって子育て支援ルームがどのような場所・存在であるかが捉えられる内容という視点で抜粋した。保育者は「保」と略している。

(2) 保育者の関わり

①遊びを拡大していく伝道師

7/31(月)、イベント「洗濯ジャブジャブ楽しいね(水遊び)」が行われた。参加したのは母親Aと子A(0歳後半)。母親Bと子B(1歳)。母親Cと子C(1歳)。母親Dと子D(2歳)。母親Eと子E(2歳)。母親Fと子F(3歳)。計6組の親子であった。

イベントでは、ビニールプールに入っているハンカチや靴下を親子できれいに洗濯をして干すという水遊びが行われた。

気温の高い夏に外で遊ばせるのが怖くてあまり外に行けてないという母親Cは、周囲の母親に夏はどこでどのような遊びをしているのか相談したり、家庭での水遊びの仕方について尋ねたりなど情報交換が行われた。周囲の親子と一緒に遊んだり話したりしながら、交流を楽しむ時間となっていた。

保育者は、子どもが水遊びを楽しむだけでは

なく母親も子どもと一緒に遊びに参加して楽しめるように声掛けをしている姿が見られた。また、子どもがイベントで楽しめる遊びを考えるだけではなく、ペットボトルに入れた水を凍らせる、洗濯遊びを行うなど家庭でも気軽に水遊びをすることができるような遊びを提供している。

②にこにこタイムの親子との関わり

10/16(月)、イベント「足形アートでかわいいりすさんを作りましょ」が行われた。来室した子どもから順番に足形を取った。初めて足形をとることで泣いてしまう子どもやまだ自分で足を紙に押し付けるのが難しい子どもは母親に抱かれながら行った。

【家庭でも遊べる工夫】

- 保 「暑いからペットボトルを凍らせてみた。」
- 母C 「えー！冷たいし、いいですね。」
- 母B 「家でもやってみよう。」
- 保 「子どもたちは凍ったペットボトルで、どうやって遊ぶかな？」
- 子C 「わあ！これつかまえない！」
- 母C 「まだ氷大きいから、中の氷取れないよ。」
- 保 「水につけてシャカシャカ振ってごらん。氷どうなった？」
- 子C (ペットボトルから出る氷を掴もうとする。)
- 母C 「氷小さくなったね！もっと水入れてシャカシャカしてみよう」
- 保 「お母さん頑張って氷小さくしてあげて。」
- 母B 「ちょっとお母さんも頑張ってみよう。お母さんたちが一番水遊び楽しんでいるね。」

母親Kと子K(2歳)。母親Mと子M(0歳後半)。母親Nと子N(0歳後半)。母親Lと子L1(生後2か月)、L2(2歳)の親子がイベントに参加した。周囲の親子も生後2か月の子L1を見て「かわいいね。」「みんな大きく成長したね。」

と生後間もない赤ちゃんに癒されたり我が子の成長を感じたりしながら関わっている姿が認められた。イベントが終わり自由遊びの「にこにこタイム」で親子がゆったりと遊んでいる際、生後2か月の子L1が眠くて泣き出しそうになっていた。

【生後2か月の親子との関わり】

母L 「眠いね。」
 (子L2(2歳)と遊んでいるのを止めて抱っこしようとする)
 保 「いいよ。私抱っこしとくし、ゆっくりしとき。いつも大変やろう。」
 母L 「大丈夫ですよ。抱っこするの大変やから申し訳ないです。」
 保 「今日は子L2(2歳)といっぱい遊んであげて。」
 母L 「すみません、ありがとうございます。助かります。」

保育者は母親の負担や大変な気持ちに共感をし、子育て支援ルームに参加している時間だけでもリラックスして楽しみながら過ごせるように関わっていた。また、子L1(生後2か月)に手間がかかるため、家庭では子L2(2歳)と1対1で関わる機会が減少してしまいがちであることは十分考えられる。そのため、子育て支援ルームに来室している時間は子L2と母親Lが少しでも密に関わり遊ぶことができるように、保育者は親子の様子を見ながら必要に応じて声掛けをしていることが確認された。

③イベント参加の受け入れ

10/16(月)、当日のイベント開始約30分前に、継続して子育て支援ルームに参加している親子Kから、今からイベントに参加したいと電話があった。定員に空きがあったため、今からでも参加可能であると受け入れた。

イベントへの参加は前日までの予約制ではあるが、幼い子どものいる家庭はその日の子どもの体調や気分で急に参加したい日もあれば、参加できなくなる日もあり、事前に予定を確定することができないことがある。毎日、日中を子

どもと2人で過ごしていると、子どもの気分が悪い時、母親もしんどい気持ちになったりどう関わったら良いのか分からなくなったりして助けを求めたい日もある。そのため、イベント参加人数に空きがある場合は、急な参加も受け入れることで、困ったときには助けてくれる場所があるという安心感が母親の心理的不安を解消することへも繋がるように支援している。

【当日参加連絡の受け入れの来室時】

母K 「すみません、急に。」
 保 「全然、大丈夫ですよ。」
 母K 「今朝からショッピングセンターに行ったり公園に連れていったりしたけどずっと機嫌悪くて。」
 「どうしようかと思ってたら先生のところ行くなって言うから連れてきた。」
 保 「お姉ちゃんがこども園に毎日来ているから、私も毎日通うって思っているのかもね。」
 母K 「いつもこの前の道通ったら、指さして行く、行くなって言うんですよ。」

④親子来室時の関わり

フィールドワーク調査を行った全ての日において、保育者は何か他の作業をしていたとしても、親子が来室した時には必ず子育て支援ルームの玄関付近まで行き挨拶をしていた。

親子が来室した時には親子の顔が見える場所まで行き、保育者から声をかけることで親子が安心して子育て支援ルームに入ることができる雰囲気を作っている。来室時には1組ずつの親子と顔を合わせて個別に関わることができるため、親子の様子をよく見て当日の母親や子の様子についてであったり、前回話していたことについての話の続きであったりそれぞれの親子に合わせた声をかけるようにしている。

また、同じ年齢・月齢の子どもの養育者が近い環境にいる母親と話すなどして相談できるような顔見知りの関係になるように、養育者同士を繋げるような手助けも行っている。

【来室時の挨拶】

(ピンポン) チャイムの音

母N 「おはようございます。」

保 「おはようございます。子Nもおはよう。」
「今日ごきげんやね。」

母N 「今日は6時から起きてて。朝から元気なんですよ。」

保 「お昼ちょっと眠くなるかもしれんね。」
「今日はもうすぐ1歳の月齢同じぐらいの子が来るよ。多分、会うのはじめてかな。」

母N 「そうなんです。」

⑤子どものもつ力や成長への気付き

10/13(月) イベント「できるかな?お野菜の絵あわせカード(食育)」が行われた。参加したのは、母親Iと子I(1歳)。母親Jと子J(1歳)。母親Kと子K(2歳)。野菜の絵が描かれたカードを並べて、自分が貰ったカードに描かれている野菜と同じ野菜の絵が描かれたカードを探すという遊びである。

【子どもの今後の成長の見通し】

保 「子Iと子Jにはまだ少し難しかったかな。」「子Jはカードに興味を示してたし、もう少ししたら合わせ絵ができるようになるかもしれないね。」

母J 「ほんとですか。」

保 「あと1年もしないうちに、半年くらいかな。そのくらいでこんな遊びもできるようになると思うよ。」

母J 「こんなのできるようになるんかな。」

母K 「なるなる。この時期の成長、めっちゃ早かったな。」

母J 「そうなんです。」

子K2(2歳)は遊んでいるうちにルールを理解して、自分で同じカードを探して楽しんでいたが、子I(1歳)と子J(1歳)はまだ遊びの内容を理解するのが難しく、手渡してもらったカードを見て遊んだりカードを触って遊んだ

りしていた。

【子どもの成長への気付き】

保 「子J今めっちゃ歩きそうやっただ。」

母J 「ほんとですか。」

保 「前に来た時よりだいぶ一人で安定してつかまり立ちできるようになってるし。もう少ししたら歩くかもね。」

母J 「確かに。最近よく一人で立ってるかも。」

保 「楽しみやね。いつ歩くかな?」

子育て支援ルームには、生後間もない0歳前半の子どもから3歳の子どもが参加している。年齢の異なる子どもがいることで「次は1人で立てるようになる。」「その次は1人で歩くことができるようになる。」と目に見えて子どもの成長の過程を知ることができる。複数の子どもがいることで、自分の子どもの成長や個性に気がつきやすい環境である。また、保育者が前回来室した時と比べて成長したところやイベントを通してできるようになっていると気が付いたことは随時言葉にして母親に伝えるようにしている。子どもと常に一緒に居ると気付かないような小さな変化も第三者からの目線で伝えることで、母親が子どもの成長に気がつくきっかけとなっている。また、年齢の高い子ができたこと、成長したことを伝えるだけではなく、年齢の低い子どもの母親が子どものこれからの成長を楽しみに思えるような言葉かけをしている。

⑥安心して気軽に利用できる場所

子育て支援ルームは午前中にイベントを行っているため、前日までの事前予約で参加可能であり、空きがあれば当日の受け入れも可能にしている。「当日空きがある」という点が当日参加の条件とはなるが、この条件さえ満たせばいつでも利用することができる。そのため、子どもの機嫌がよくない時、一人で子育てをすることに疲れを感じた時に受け入れてくれる場がある。

親子で公園などへ行っても、ずっと子どものことを一人で見っておかなければならない。しか

し、子育て支援ルームでは、自分たち親子のことをよく知ってくれている保育者や同じ境遇で子育てをしている母親など大人が複数の目で子どもを見ることができる安心感もある。このように、気軽に安心して利用することができる場が母親の心の拠り所になっていると考えられる。

⑦子どもを遊ばせる

子育て支援ルームには様々な玩具があり、子どもが好みに選んで遊ぶことができる。子育て支援ルームの様々な場所に玩具が置かれていて子どもが自由に遊べるような環境がある。棚には乳幼児が見られるような高さに玩具が並べられている。

⑧母親がリフレッシュできる場所

子育て支援ルームでは、常に母親たちと保育者の会話が飛び交っている。子どもの食事や午睡について、歯磨きや病院、家庭での遊び方の工夫や子育てで聞きたいことなど。同じ境遇で子育てをしている母親には同じ悩みや共感する話題があるからこそ、母親同士の話しやすさに繋がっている。子育て支援ルームは子どもと養育者が一緒に参加する場であるため、自然と母親同士の距離も近くなり、繋がりを作るきっかけが多くある環境であることが理解できる。

また、母Bは「子どもとずっと一緒にいて大人の人と関わることが少ないから大人と話がしたい。」と言う。普段の生活で日中は子ども以外と関わることがあまりないため、大人と話すことで子育ての大変さを共感し合ったり子育て以外の話もできたりすることから、母親が子どもから少し離れて心身共にリフレッシュすることができる場所であると考えられる。

⑨子育ての相談ができる場所

子育て支援ルームには、専門家である保育者がいるため、子どもの発達に関する悩みや養育者自身の子育てに関する悩みなどを相談したり、保育者の経験や専門的な知識からのアドバ

イスを聞いたりすることができる。

子育てをする母親にとって、専門的な医療機関や相談所に行く前に身近にいる信頼できる保育者に相談することができる場所があるのは心強いことが理解できる。

⑩子どもの成長に気がつくところ

子育て支援ルームには、0歳前半から3歳の異なる年齢の子どもが来室する。そのため、月齢の低い子どもを見て、自分の子どもの成長に気が付くことができたり、普段家庭では見せない子どもの姿を見て成長を感じられたりすることがある。反対に、年齢の高いお姉ちゃんお兄ちゃんを見て、子どものこれからの成長を楽しみに子育てをするきっかけにもなる。また、普段家庭にいと気が付かないようなことも第三者の保育者視点から気が付いた子どもの成長を母親に伝えることで、子どもの少しの変化や小さな成長にも気が付くことができる。

3. 保育者へのインタビュー調査

(1) 研究方法

調査時期：2023年10月24日

調査対象：子育て支援ルームの保育者B

調査方法：半構造化面接。インタビュー開始前に研究内容や調査の主旨、ICレコーダーによる音声記録をすることを口頭で説明して同意を得ている。

分析方法：インタビューの音声データを逐語録化した後に、主旨を損なわない範囲で要訳している。

(2) インタビュー内容

①子育て支援ルーム開設の経緯

保育者Bは、保育園で7年間勤務し、その後出産を経て再就職をしている。そのタイミングで、京都市から勤務先が委嘱を受け子育て支援ルームが開設された。

はじめは誰も来室しない日もあり、周知してもらうことが難しかった。市役所や児童館など親子が利用する場所にパンフレットを置いてもらった。また、市役所が行っている1歳半健診

でフォローが必要と判断された親子が利用できる教室に参加して親子と関わる中で悩みを相談できるような信頼関係を築いていった。

②コロナ禍における子育て支援

2020年に全国で新型コロナウイルス感染症が拡大し、子育て支援ルームの一時閉室を余儀なくされた。その間に親子との繋がりが切れないよう、オンラインZOOMを利用して、家庭でできる簡単なイベントを行った。材料が必要な製作遊びに関しては、材料を各家庭に配送し、家庭の負担にならないような工夫をした。

コロナ禍が落ち着いてきてからも、外に出づらいう人や多くの人に会うことが苦手だと感じる人のために月1回程度でオンラインでの活動を続けている。また、オンラインシステムができたことで、遠方の参加も可能になった。引越先で、まだ知り合いがいなかったり外に出ることに不安があったりする親子が参加してくれることもあり、つながりが途切れることなく続いている。

「こどもまんなか」政策のように、子どもを中心に地域の輪を広げていきたいと考えている。高齢者施設と交流があり、親子で施設に行くと家族に会えない高齢者の方が喜んで歓迎してくれる。コロナ禍の影響で直接関われない時期もあったが、オンラインで子どもの発表会を見もらうなど、高齢者の方とも繋がりを大切にしている。

近年、地域とのつながりが疎遠になっていると言われているため、「身近に信用できる人がいる」と安心して子育てを行ってほしい。子育て支援ルームをきっかけに繋がり、地域全体が潤っていくよう、地域の学生や高齢者、これから親になる人や保育者を指す人など様々な人を巻き込んで繋がりを作れるような活動も行っている。

③子育て支援を行う保育者の思い

こども園のように園児だけではなく、こどもと養育者が参加する場であるため、親子でできる活動であるかどうかを常に意識している。

親子で参加することで直接子どもの成長や発達の過程を知ることができるよう発達段階に合わせた遊びを行っている。子育て支援ルームでの活動から遊びが発展し、家庭でも親子が関わるきっかけ作りをしたいと考えている。

④親子との関わり方

親子が来室してきたときに入りにくい雰囲気を作らないように気を付けている。自分から積極的に他の親子の間に入っていける人と、消極的で話しかけにくい人がいるように、その人の雰囲気や性格を見極め、必要に応じて手助けをしながら関わるようにしている。養育者同士で共通点がある人や子どもの年齢が近い人同士で繋がりを作れるよう、養育者同士を繋げるようにしている。

⑤これからの子育て支援

子育て支援ルームに来られない親子や子育て支援ルームの存在自体を知らない支援を求めている親子が利用できるようにすることが今後の課題である。多くの親子に知ってもらうため、InstagramやLINEのようなSNSを利用したり、市役所や児童館、商業施設、スイミングスクールなどに、ちらしを置いてもらうようにしたりするなど、いつか成果が出ることを願って地道に発信活動を続けている。クリスマスのような何らかのイベントへの参加をきっかけに、そこから継続的な利用につながれば良いと考えている。

4. 考察

子育て支援ルームAにおけるフィールドワークによって、保育者が中心となって運営される地域子育て支援拠点では、どのような活動が行われており、親子に保育者がどのように関わっているかを明らかにしてきた。さらに、子育て支援ルームA開室当時から携わっている保育者へのインタビュー調査によって、開室の経緯や活動への思いを尋ねた。以上の2つの調査結果を基に通常のクラス運営による保育とは異なる地域子育て支援拠点における保育者の役割につ

いて考察する。

(1) 「子育て支援」と「子ども・子育て支援」

通常のクラス運営による保育において、園児である子どもは保護者と離れて集団保育の中で様々な経験をし、子ども同士が関わり合いながら成長していく。保育者は、子どもたちが興味・関心のあることに発達段階を考慮した遊びを通して取り組める環境を整え、日常生活の中で成長発達を促していくことが役割の1つである。これは、子ども自身の育ちを遊びや生活を通して支援する「子ども支援」であると表現することが出来る。

一方、既述したように、保育者には子どもの幼児教育保育のみならず養育者（保護者）支援を行うことが求められるようになった。中でも本項で注目してきたのは、未就園児家庭への支援である。

保育者以外にも子育て支援に携わる専門職はいるものの、保育者が子育て支援を行う意義はどこにあるのだろうか。本調査で明らかになった子育て支援ルームにおける保育者の特徴的な役割の1つは、先に「遊びを拡大していく伝道師」と表現した点にある。親子が共に楽しめる遊びを通して、養育者が子どもの成長に気付き、家庭でも子どもと関わるきっかけを作っている。

第2筆者は、本調査の対象とは異なる保育者や第1筆者ら保育学生（当時）と協働して臨床心理学の観点から子ども・子育て支援を実践している（瀬々倉・清水，2021・2022）。子ども子育て支援において、遊びの専門家としての保育者の役割は欠かすことが出来ない。

また、本調査においては、0歳児を母親に代わって抱き上げてあやし、母親が上の2歳児と密に関われるように配慮している様子が抽出されている。養育者の育児負担を軽減したり、時には不慣れな養育者に育児の見本をさりげなく提示したりすることも保育者の役割として重要である。

一般的には、「子育て支援」という言葉が浸透してしまっているが、子ども家庭庁の掲げる

「こどもまんなか」社会を実現するためには、子どもの育ちを直接支える「子ども支援」と子育てをする養育者を支える「子育て支援」の両方、つまり「子ども・子育て支援」が必要なのである。従って、通常保育の範囲内で園児の保護者に対する支援を行うことに留まらず、未就園児とその養育者に対する支援における保育者の役割は大きくなっている。

また、脆弱化した地域コミュニティのなかで、親子との信頼関係を築き安心して立ち寄ることが出来る居場所作りを行っている。さらには、子育て支援ルーム内外において親子同士や高齢者、大学生や地域のサークルなどをつなぎ、地域コミュニティの再構築を試みている。これらの試みは、親子の孤立や閉塞感からくる育児不安の深刻化や虐待を未然に防ぐ新たな子育て文化の構築の試みと捉えることが可能である。

筆者らが行っている子ども子育て支援活動においても、コロナ禍でオンラインプログラムを行っていた際、B保育者から下見としての参加の申し出があり、その後も交流が続いている。

(2) 子育て支援ルームが抱える課題

子育て支援ルームが抱える課題として、子育て支援を必要としているものの、子育て支援ルームのようなところへ出向くことにためらいがあり参加できない親子、子育て支援を必要としているが子育て支援ルームという場所自体を知らずに参加できない親子への支援が挙げられる。さらには、支援が必要であるにも関わらず、支援を求められない親子へ如何に支援を届けるかといった課題が挙げられる。

保育者Bも子育て支援ルーム開設時から、情報発信が最も難しく現在も尚課題として残っていると述べている。

これについては、内閣府及びこども家庭庁によってアウトリーチ（家庭訪問）のあり方が検討されており、保育者の更なる役割が期待されている（株式会社NTTデータ経営研究所，2023）。

地域子育て支援拠点事業は、図らずもコロナ

禍において、地域をつなぐ大きな役割を果たした。乳幼児健診が延期となり、幼保園が休園している中で、簡単な材料を家庭に届けてオンラインで乳幼児家庭とつながり、孤立化を防ぐ一助となった。

また、上述したように、同じくコロナ禍でも活動を止めずオンラインで乳幼児家庭とつながりプログラムを届けていた筆者らの活動を見出し、保育者自らがオンラインプログラムに参加し、アフターコロナにおいては、大学から地域子育て支援拠点子育て支援ルームAへのアウトリーチへと連携関係を結ぶ役割を果たした。これらの保育者の働きは、通常のクラス運営による保育幼児教育とは異なる新たな保育者の役割が十分に発揮された結果である。

文献

- 株式会社NTTデータ経営研究所（2023）未就園児等の把握、支援のためのアウトリーチの在り方に関する調査研究，全127頁
- こども家庭庁（2023），子ども・子育て支援新制度 <https://www.cfa.go.jp/policies/kosodatechien/>（2023/12/8閲覧）
- こども家庭庁（2023），地域子育て支援拠点事業について（2023/12/8閲覧）

水谷百（2023）認定こども園内施設における子ども・子育て支援—保育者の新たな役割—，全36頁，未公開

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017），幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説，第4章子育ての支援

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会（2017）地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」【改訂版】，p5

大豆生田啓友（2006），育て合い，育ち合いの子育て支援—保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論，関東学院大学出版会

瀬々倉玉奈・清水文（2021）子ども・子育て支援の学びとICT—オンラインぴっばらん活動のプロセス—京都女子大学教職支援センター研究紀要(3)，p121-134

瀬々倉玉奈・清水文（2022），オンラインによる子ども・子育て支援の可能性—コロナ禍2年間における活動の実践報告—京都女子大学教職支援センター研究紀要（4）p.177-187

謝辞／付記

本稿は，第1筆者の水谷（2023）を基に，第2筆者の瀬々倉が改めてデータを精査し加筆修整したものである。フィールドワークには，水谷が臨んでいるが，瀬々倉も複数回現場に足を運び，インタビュー調査対象に補足的な質問を行っている。ご協力くださった地域子育て支援拠点つどいの広場A子育て支援ルームの関係者の皆様に感謝申し上げます。